

説教（福音の宣教）

「心を吟味される神」

# モーセの死（申命記34章1～8節）

1-3節 モーセはモアブの平野からネボ山、すなわちエリコの向かいにあるピスガの山頂に登った。主はモーセに、すべての土地が見渡せるようにされた。ギレアドからダンまで、ナフタリの全土、エフライムとマナセの領土、西の海に至るユダの全土、ネゲブおよびなつめやしの茂る町エリコの谷からツォアルまでである。

- 主なる神はピスガの山頂でモーセにカナンの地をすべてお見せになった。
- そこは神の約束の地
- モーセはどんなに喜んだだろうか。ここが先祖アブラハムが暮らした地である。イスラエルの民が何世代も夢に見た場所

# 主による死のお告げ

4節 主はモーセに言われた。「これがあなたの子孫に与えらるゝわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見るとした。あなたはしかし、そこに渡って行くことはできない。」

- モーセはその地に入ることを許されなかった。
- モーセの心中はいかばかりだったか。
  - ✓我々の感覚だと、入れてください、と神に嘆願するところだろう。
  - ✓しかしモーセの心中は書かれていない

# 主の命令によって死ぬ

5節 主の僕モーセは、主の命令によってモアブの地で死んだ。

- 「主の僕モーセ」この「しもべ」は奴隷ではなく、召使いという意味
  - ✓ 「主のしもべ」は彼の代名詞
- 「主の命令によって」人の生が主のものである以上、死は誰にとっても主の命令によって起きる。
- 「モアブの地」死海の東側。アブラハムの甥ロトの子孫が住んでいた。

# 神の命令を受けたモーセの心中は？

- 神はモーセの心を吟味して知っていた。
- 申命記32章のモーセの歌や33章のモーセの祝福に書かれているモーセの言葉から、モーセはどのような神の命令にも従う信仰を持っていたことがわかる。
  - ✓申32:39 「わたしは殺し、また生かす。わたしは傷つけ、またいやす。わが手を逃れうる者は、一人もない。」
  - ✓申33:3 「あなたは民らを慈しみ、すべての聖なる者をあなたの御手におかれる。彼らはあなたの足もとにひれ伏し、あなたの御告げを受ける。」
- 私は主のものという神に対する信頼（信仰）が問われている。

# モーセの埋葬

6節 主は、モーセをベト・ペオルの近くのモアブの地にある谷に葬られたが、今日に至るまで、だれも彼が葬られた場所を知らない。

- モーセはモアブの地に埋葬されたが、その場所は誰も知らない。
- 「ベト・ペオル」はモーセたちの旅の途中にある土地
  - ✓申 3:29 「我々はこうして、ベト・ペオルの前にある谷に滞在していた。」
  - ✓申 4:46 「それは、ヨルダン川の東で、ヘシュボンに住むアモリ人の王シホンの領土にあるベト・ペオルの前に広がる谷においてなされた。」
  - ✓ヨシ13:15-21 「モーセがルベンの人々の部族に氏族ごとに分け与え、彼らの領域となったのは、・・・ベト・ペオル・・・であって、ヘシュボンを都としたアモリ人の王シホンの王国全体に当たる。」

# モーセの死

7節 モーセは死んだとき百二十歳であったが、目はかすまず、活力もうせてはいなかった。

- モーセの享年は120歳、驚異的な長寿
- 目がかすむことはなく、活力もあった
- モーセの死は生物学的な死ではなく主の命令によってであった。
  - ✓主はモーセの地上での使命を終わらせた。
  - ✓それは安らぎに入ること

# モーセの死

8節 イスラエルの人々はモアブの平野で三十日の間、モーセを悼んで泣き、モーセのために喪に服して、その期間は終わった。

- 「喪に服す」 直訳は「モーセのために泣きに泣いた」
  - ✓ 「悼む」 = 人の死を悲しみ嘆く
  - ✓ 「喪に服す」 = 死者を偲んで身を慎む
- 主によって取り去られた、という感覚のもとで、死者との別れを受け入れ、死者との新しい関係に入る。



# パウロの場合（I テサ2章1～8節）

- パウロもモーセと同様、神の御心を知り、それを行っていた
- 彼の手紙からはその確信が伝わってくる
  - ✓ **正直** 迷いや不純な動機ではない、ごまかしではない、へつらったり、かすめ取ったりしない、人間の誉れを求めない、おさなごのよう  
3、5、6、7a節
  - ✓ テサロニケの信徒たちに対する**母親のような愛情** 7b節
  - ✓ 神の福音を伝えるばかりでなく、自分の**命さえ喜んで与えたい**と願った 8節

# パウロ、テサロニケ宣教を回想

1節 兄弟たち、あなたがた自身が知っているように、わたしたちがそちらへ行ったことは無駄ではありませんでした。

- 「無駄」は「成果のない」「効果のない」「力のない」という意味。
- テサロニケ訪問が無駄ではなかったと確信を持っている。
  - ✓3章5節にはテモテがテサロニケから帰ってきて、人々の信仰と愛について嬉しい知らせをもたらしたことが書かれている。

# テサロニケでの宣教の実り

2節 無駄ではなかったどころか、知ってのとおり、わたしたちは以前フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語ったのでした。

- フィリピでは何度も鞭で打たれ、牢に投げ込まれ、いちばん奥の牢に入れられて、足には木の足枷をはめられた（使16:23-24）。
- テサロニケでも騒動はあったが（使17:1-13）福音を聞いて受け入れた人々が起こされ、彼らは近隣に福音を宣教した（I テサ1:2-10）。

# 神に喜んでいただく宣教

4節 わたしたちは神に認められ、福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。

- パウロの宣教は神に喜んでいただくため
  - ✓ 艱難の中で培われたパウロの自由において
  - ✓ 聴衆に全身全霊で働きかける正直で真摯な態度
- 神は人の心を吟味されるお方

# 人の心を吟味される神

- 「**吟味**」 念入りに調査する、本物かどうか調べる、見分ける
- 神は私たちの心を隅々まで知っておられる。
  - ✓ 神の目を盗むことの**恐れ**、すべてを知ってくださるという**安心**
  - ✓ 壁掛け Christ is the head of this house the unseen guest at every meal the silent listener to every conversation (キリストはこの家のかしら、すべての食事の**見えざる客**にしてすべての会話の**無言の聞き手**)
- 父なる神は私たちを丸ごとご存知で愛してくださる。キリストは罪を執り成して恵みをくださる。聖霊は私たちと共にいて導いてくださる。

# パウロ・モーセは私たちと違う存在か

- モーセやパウロと私たちは違う人間のように思える。何が彼らと私たちを分けるのか。
- 人は自分の心しかわからない。それも自分の欲するものしか分からない。本当の心は自分でも分からないのかもしれない。
- 人は聖霊を受けて新しく生まれた。神の子とされた。しかし神の子になったと言われても実感がわからない。
- パウロは神の子（神の相続人）であることを自覚していた。
- 私たちも神の子であることを自覚するならばモーセやパウロと同じ心を持つことができるかもしれない。

# どうすれば神の子であることを自覚することができるか

- キリストを着る

✓ 罪を犯してしまう人間が罪のないキリストを着て、キリストのように振舞おうとする。「そんなことできない」ではなく「そのようにしよう」という意思を持つ。

- 良い意味での選民意識（神の子意識）を持つ

- 神の子とされたことは罪がなくなるということではないが、神の子としてふさわしい行いをするように心がけるようになる。

# 神の子の自覚を持って生きることは苦しみの道か

- 苦しみの道ではなく**喜びの道**。
- 神に自分の本当の姿が知られているというのは**安心**なこと。
  - ✓神は人を良く知っていて母親のように愛おしく思っていてくださる。
- 隠すことも、飾ることも、神の前では**必要ない**。
  - ✓自分のありのままを出すことができる。
  - ✓他人のことを思いやる**ことができない自分を嘆き、母のような神に自分を投げだすことが許されている**。神の子なのだから。
- 神の子であるということは**まことの自分でいられるということ**。



# パウロのように生きることが許されている

わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただく。4節

- 生き方はその人そのもの
- どう生きるかはその人が何を大切にしているかを表す
- キリストに贖われ、神の子となったことを自覚するならば無償の愛を隣人に注ぐ生き方を目指すようになる。
- それはモーセやパウロの生き方であり、テサロニケの信徒たちの生き方である。
- 私たちにもその生き方が許されている。それは喜びの人生だ。